新事務部長に木下氏

～小野田部長が勇退～

新、木下事務部長

〔本店〕6月30日付で定年退職になった事務部長、小野田徳太郎氏の後任には、九電からの出向者木下満恵氏が決った。小野田前部長は、九電を定年退職後、昭和133年当社に入社され、10年5カ月間勤務、事務部門の統轄、その基礎づくりに傾注された。その功績は大きいものがある。また、本紙発刊の発案者の一人でもある。後任に決った木下新部長は、九電労務部次長から当社に出向され、前小野田部長の後任として、りっぱな人材である。7月20日、新旧両部長から本紙を通じて次のようなご挨拶があった。

入社のご挨拶

木下　満恵

7月1日付で、小野田事務部長の後任として、当社にお世話になることになりました。

一応の事務引継は受けましたが、なにしろ入社一年生、会社の実情については白紙同然です。引続き勉強して、一日も早く〝九火マン〟になりたいと思っています。

聞くところによると、当社では、古賀社長以下従業員各位が、全社一丸となって協力され、社業も益々隆盛に向っているとのことでご同慶にたえません。しかし、そのかげには設立当初に於ける先輩各位の並々ならぬご苦労があったと聞いております。そうしたこれまでの各位のご苦労が今日の当社の基礎になっていることと思います。

私はこの恵まれた時期に、当社の一員として働かせていただくことに対し、限りないありがたさと喜びを覚えます。またそれだけに自分の責任の重大さを痛感しています。

今後みなさんと共に、九火発展のため全力を傾注していく覚悟です。

先輩諸氏のご指導と、従業員各位のご支援、ご協力を切にお願いいたします。

思い出の社屋

小野田　徳太郎

私が入社しましたのは昭和33年2月でありますから、まる10年と5カ月になります。浅学非才ながら大過なく勤めさせていただきましたことは、これ偏に会社幹部の方々のあたたかいご指導、ご援助の賜ものであり、また後輩諸氏の心からなるご協力のおかげであると深く感銘、感謝いたしております。

ふり返ってみますと、私が入社しましたころは、本店業務は苅田事務所内で行なわれていましたが、本店業務を行なう社屋としましては真におそまつでした。台風のために屋根が飛ばないように、足場丸太と番線で補強されたバラックで、宮崎県高千穂の農家に見られるような千木（ちぎ）を思わせる丸太の交叉した先が今でも目に浮びます。それにひきかえ現在の本店は、この九電不動産ビル5階にあるりっぱな事務所となっています。社長の英断で机やいすなども新しくなり、近代的事務を執るに必要な設備を整え、他企業に見劣りしないりっぱな事務所になりました。これは私が入社した当時の資本金500万円で赤字を出していた決算書の数字と年々社運が発展してきた近年の決算書の数字との比較の差が、このようなりっぱな社屋になったという型のうえでも端的にあらわれているものと感じております。

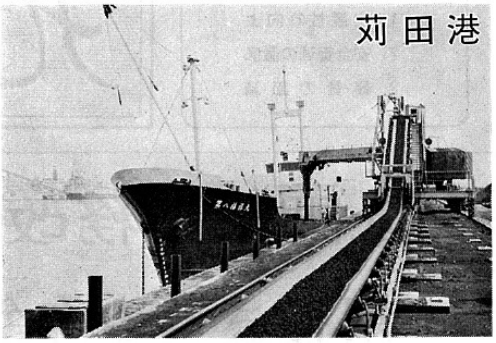
本店の午後3時、全員のラジオ体操にご老体の相談役までが参加されて、総員32名がいっせいに立ち上って体操する光景は、この十数年来、年毎に社運の隆盛を築き上げてきた社力がここにもあらわれているのだと私には感じられます。バラックから近代ビル事務室へと発展成長してきた10年間を無事勤めさせていただいた私は、働く者として誠に意義深い好時期にめぐまれたといえます。私にとって生涯忘れ得ない思い出となりましょう。

事務処理上これから改善すべきことや、いま一歩という点もありましたが、私、日常業務多忙のためと、不幸にして最近の持病のためとで、その意を達し得なかったこともあり各事務所のみなさんにもご迷惑かけ申しわけない気持であります。

当社はこれからも、ますます発展してゆくことと堅く信じております。どうぞみなさんお元気で、会繁栄のためと、みなさんのご栄進ため毎日の業務に励まれますよう願いしてお別れの言葉とします。

（昭和43年7月20日本店にて）

前、小野田事務部長



苅田港

九州開発の拠点

工業港へ大きく跳躍

〔苅田〕西瀬戸内臨海工業地帯の一つの拠点として開発が進んでいる苅田港は、今年の4月九州で21番目の国際貿易港に指定され、これまでの石炭積み出し港から工業港へと脱皮を急いでいる。苅田町は、この開港によって目ざめ、将来への大きな跳躍が約束された感じだ。

4月開港以来、外材輸入船をはじめ、セメント輸送船などの大型船の入港が目だっている。従来門司港まで回送していたセメントも苅田港から直接輸出している。4月、5月に香港向けに各一回セメント輸出船を出したほか、韓国籍大型船が釜山から無煙炭をつんで入港するなど、輸出入の実績を伸ばし貿易港としての好調なすべり出しだ。

苅田港をとりまく工業地帯には九電苅田発電所、西日本共同火力新苅田発電所、豊国、麻生、宇部興産のセメント工場、西村産業苅田合板工場などがある。苅田町では、これまで船の物資が門司港経由であった不便が解消されると明るい話題になっている。

苅田港は42年中にセメントなど4万6,000トンを輸出、外材など2,600トン以上を輸出している。このほか、石炭、鉱石、石灰石、粘土、重油の移出入も最近大巾に伸びている。しかし、同港の将来繁栄のカギは、雑貨の荷動きにあると見られており、タイルや衣料品などの積み出し促進を図っているようだ。

今年から同港は『港湾整備五カ年計画』がスタートする。この計画によって、これまで3,000トン級から1万5,000トン級まで大型船舶の接岸が可能になる。これにともなって、倉庫、船舶への給水設備や多くの附属設備の増設が進められる予定。戦後、一時は港廃止の声もあった苅田町は、いま発展の糸口をつかんだといえる。

社旗できる

当社では、先年から社旗制定について検討していたが、さる7月15日3Kマークがくっきりと描かれた社旗ができあがり、さっそく各所に配付された。

この社旗は、下部約三分の一をピーコック・グリーン（こゆい緑色）にして、その中に角ゴチック文字で社名を白ヌキにしてある。上部三分の二は白地で中央に、グリームソン・レーキ（えんじ色）の社章がくっきりと描かれている。大きさは大小二通りがある。

全体的に見ると、グリーン地に固められた社名の上に、3Kマークが浮き上った感じである。社旗は各所で毎朝掲揚されるが、この旗がわれわれのシンボルとして高くひるがえることだろう。＝写真はできあがった社旗

安全教室 —<3>—

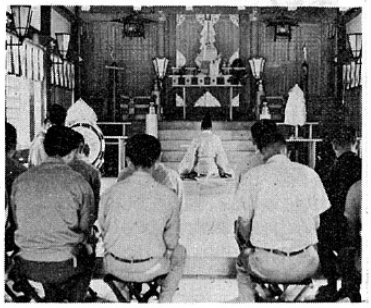
災害コストと能率

「災害コスト」という言葉がある。その災害が起ったために要した費用のことである。しかし、われわれは災害コストと聞けば、負傷者に対する医療費などの直接的費用のみを考えがちである。アメリカのハインリッヒという人は、災害コストの中で第三者の不労働賃金や物的損失といった比較的目だたない間接的費用の大きさを統計し、数値を示している。一般に直接的費用と間接的費用の比は、1：4になるといわれている。もし、その災害が発生しなかったならば、直接的費用もいらないが、災害発生のためにムダになった時間、人手、破損した機械工具や建物の復旧費、災害状況調査費、対策的費用もすべていらない。企業にとっては災害が1件でも少なくなれば、それだけ従業員の不幸をなくし、ムダな費用をなくせるのである。

安全がもうかるものだという考えはわかっていても、実際に作業にいかしている人は少ない。それは「安全コスト」なるものが、明りょうな実績として示されていないからだろう。安全は不能率だという不信感を持っている人が、いまだに多いという事実である。K電力会社では、年間を通じ二つの現場を対象にして、労使が協同で安全協力を実行し、結果を細部にわたって検討している。その実績概要によると、数値的には少ないが、はっきり利益の向上につながった安全が確認されたという。ただ、われわれは良好な安全成績による利益というより、その努力過程において、多くの労働者が危険からすくわれているという事実を見逃してはならないのである。

ある工場で鉄板を二本吊りにして起重機で運般していた。この鉄板に二人の労働者が手をかけて、鉄板の進行とともに、移動していた。「なぜ鉄板に手をかけるか」と質問してみると、「鉄板がゆれるから」と答える。われわれは事実をよく見なおさねばならない。元来、二本吊りは極めて不安定である。おそらく起重機で吊上げるのに相当の時間がかかったことだろう。これを四本で吊ると時間的にもムダが少なく、労働者が鉄板をささえて移動する危険はなくなり、鉄板運搬のスピードも倍になるのである。したがって、時間的にも大へんな能率化が可能になる。このように日常作業の安全を検討することにより、職場の安全化と能率化がはかれるのである。

建設工事の安全を祈願

〔大分〕大分事務所では夏期安全期間の行事をかねて、建設工事期間の安全祈願祭を実施した。大分市内の春日神社に各課の代表が集まり、大分発電所建設工事が安全にりっぱに終るよう祈願を行なった。＝写真は春日神社の社殿で行なわれた安全祈願祭。

（7月4日）